

## 音楽を通して、身体と宇宙をつなぐ

オーケストラ・コンサート 武満徹の宇宙

2006年5月28日

東京オペラシティ コンサートホール

中村 芳生

宇宙に題材を求めた武満徹の協奏的作品3曲。それらは演奏者たちの身体的な個性を発揮させる、巧妙な装置として準備されていた。そのことを強く感じさせる演奏会。

「カシオペア」で打楽器独奏をつとめた加藤訓子は、弾力性に満ちたしなやかな身体から発するリズムを聴かせた。体の中心部から発した動きが波となり、次第に速度を増しつつ、腕から手首、指先へ、楽器へと伝わり、そこからは逆に体の中心部へ戻っていく往還運動。その運動から生まれる音楽は、獲物を追う野生動物の肉体のような、たゆむことのないパルスとして聴衆の耳を打った。

「アステリズム」で登場した高橋悠治の身体はそれとは全く異なる。ピアノに向かい、指先、ひじ、上半身といった体の各部位が、それぞれ別々の意思を持つかのように自由に動く。そこから発する音も、予期せぬ響きで空間に炸裂し、あたかも真空の宇宙に突然、無数の星が誕生するさまを思わせた。

「ジェモー」は古部賢一のオーボエとクリスチャン・リンドバーグのトロンボーンを独奏として演奏されたが、ふたつの楽器の音量差を考えただけで、演奏の困難さは想像できる。しかしオーボエの、ときに粘膜的とすら感じさせるほど官能性に満ちた響きには、トロンボーンの、聴衆に向かってダイナミックに直立するような響きに打ち消されることのない、強い存在感があった。曲の第4部でオーボエがトロンボーンを包み込んでしまうかのように感じさせた場面は、この日の一番の聴きもの。ふたりの指揮者、若杉弘の繊細で皮膚感覚的な動きと、高関健の無駄がなく筋肉質の動きも非常に対比的だった。

西洋の伝統的なオーケストラ音楽は、音楽構造の面で垂直的にも水平的にも強いヒエラルキーを持っているが、武満徹の音楽はそうではない。「すべてのパートが歌であるように」音が選ばれ、時間の中でゆるやかにつながっている。だから、それぞれの奏者がその瞬間ごとに生み出す音が、いつも演奏会の中心となりうる構造を持つ。その可能性をよく実現した演奏会だったと言えるだろう。

武満はこの3曲で、オーケストラの楽器配置もそれぞれ独自のものを工夫し、オーケストラというシステムに対して、楽員も聴衆も自覚的であることを求めている。東京フィルハーモニー交響楽団は各所で美しく整理された響きを奏でたが、システムを超えた音楽の実現という意味では不満も残った。

とはいえ、それぞれの演奏者が、自らの身体というマイクロコスモスを音に変えていくことが、そのままマクロコスモスの探求として聴こえてくる、貴重な体験だった。